

日本学術会議 経済学委員会・環境学委員会合同  
**フューチャー・デザイン分科会（第 26 期・第 3 回）議事録**

1. 日時：2026 年 9 月 2 日（水）10：00 - 11：15

2. 会場：オンライン会議（ZOOM）

3. 議題：

- 1) 前回議事要旨の確認
- 2) フューチャー・デザイン 2026 と今後
- 3) これまでの活動報告
- 4) その他

**出席者：**大垣 昌夫、澤田 康幸、馬奈木 俊介、浅利 美鈴、井伊 雅子、岩佐 和道、宇佐美 誠、江守 正多、栗山 浩一、香坂 玲、○西條 辰義、土居 丈朗、中川 善典、平澤 毅、宮越 龍義（委員：15 名）（○：議事録作成）

**欠席者：**上條 良夫、鈴木 朋子、阿尻 雅文、恵谷 浩子、齊藤 誠、辻 佳子、西村 直子、松島 斉（8 名）

### 議事要旨

今回は、第 26 期第 3 回会合として、前回議事要旨の確認・承認を行った後、今週末（9 月 5 日・6 日）に開催を控えた「フューチャー・デザイン 2026」のプログラム内容の紹介および事前検討を行った。また、岩手県矢巾町におけるフューチャー・デザイン（以下、FD）の「活用指針」策定を通じた組織的な制度化の取り組みについて詳細な報告があり、時空間の拡大、行政の実務、地域財政の持続可能性、さらに学術的アプローチや悪用防止策など、多角的な観点から活発な意見交換が行われた。

#### 1. 前回議事要旨の確認

西條委員より、前回（第 2 回：国連「未来サミット」報告）の議事録の共有が行われ、内容に関してメンバーから特に異議はなく、承認された。

関連して、国連の「将来世代宣言」が発出された後の動きについて、西條委員より簡単な補足がなされた。国連での宣言後、若い世代を集めて FD を実施する動きがあり、国連大学に対しても「若い世代だけでなく、中高年世代も含めた多様な年齢層の関与が必要である」という提言・報告を行ったものの、その後の詳細な国際的進展については現時点で十分には把握できていない状況が共有された。

#### 2. 「フューチャー・デザイン 2026」の紹介と意見交換

2026 年 9 月 5 日・6 日に開催が予定されている「フューチャー・デザイン 2026」（日本学術会議の経済学委員会・環境学委員会合同フューチャー・デザイン分科会、キャノングローバル戦略研究所等の主催）について、プログラム構成および主要なセッションの紹介が西條委員、中川委員、平澤委員より行われた。

## 報告のメモ：

### ・基調講演：十倉雅和氏（経団連名誉会長・前会長）による「社会性の視座」

経団連の活動の最後に発表された「フューチャー・デザイン 2040」のビジョン、およびその内容をまとめた同氏の著書について紹介された。2040 年に向けた日本の将来ビジョンを構築し、そこに至る具体的な道筋として「道州制の導入」「若者世代だけに社会保障負担を過度にかけない新しい社会保障制度の構築」「富裕層に対する課税割合の引き上げ」などの大胆な提案が政府へ提出されている。また、2040 年に向けた名目 GDP1,000 兆円という経済目標を描きつつ、単なる経済成長のみならず、環境、格差、公平といった社会的な課題に真剣に取り組む「社会性の視座」が基調講演の核となる。脱成長系の視点を持つ立場から様々な議論が起こることも想定され、重要な論点となる。

### ・特別報告「FD×デザイン」（中川委員）：

博報堂のクリエイティブディレクター佐藤カズー氏を招き、1.5 時間の特別セッションを開催する。未来ビジョンを描く試みが、実際の社会変革にどのように繋がるのかという潜在的・本質的な批判や懸念に対し、システム論のみならず「デザイン思考（Design Thinking）」を掛け合わせることで、ギャップを埋めるためのより具体的かつ実践的な方策を議論することが説明された。

### ・「文化遺産（ヘリテージ）を未来から考える」フューチャー・デザインの潮流（平澤委員）：

イコモス（ICOMOS）関連の活動、1994 年の奈良ドキュメントから 30 年にわたる歴史的文脈が紹介された。現在、群馬県においては「ヘリテージ・エコシステム」をキーワードに、自然環境だけでなく無機的な対象物も含めた包括的な関係性の中で将来像を描く FD 的实践が進められている。平澤委員からは、初日午後のトップセッションにおいて、山田氏から具体的な内容が報告される予定であることが紹介された。ユネスコ（UNICEF 含む）やイコモス等では、スウェーデンのコーネリアス・ホルトフ氏らが提唱する「フューチャーズ・リテラシー」とフューチャー・デザインを融合させた概念構築が始まっており、グローバルな大きな潮流になりつつある。

### ・財務省・日本総研との取り組み（西條委員）：

財務省や日本総合研究所（日本総研）と進めている将来洞察（フォーサイト等）の背景として、FD の全体像を構成する 3 つの時間軸・デザインパーツについての理論的整理が共有された。現在から予測する「プレゼン・デザイン（予測・ホライゾン・スキヤニング）」、過去の再評価から代替歴史を描く「パスト・デザイン」、そして将来の視点から現在を振り返る「フューチャー・デザイン（フューチャーズ・ヒストリーの構築）」という、時空間を拡大し統合的に思考する枠組みの重要性が提示された。

## 質疑応答・意見交換：

**香坂委員：**三重県松阪市における農業および森林・土地利用の合意形成プロジェクトにおいて、中川委員に入っていただき実践した際、過去 30 年の歴史的経緯を踏まえた「パスト・デザイン」を重点的に行った。土地利用の議論はどうしても視野が狭まり膠着しがちだが、時空間

の幅を広げるアプローチによって議論が深化し、極めて有意義であったことが実体験として報告された。

**西條委員：** パスト・デザインを組み込まなければ議論に真の深みが出ない。一般に「フューチャー・デザイン」という名称から、単に将来にジャンプして今を考える行為だけと誤解されがちだが、パスト・プレゼン・フューチャーの3つのパーツが時間軸と空間軸（スペース）を包括的に捉え広げていく全体的な枠組み（フレームワーク）であることを、しっかりと対外的に見せていく必要がある。

### 3. 矢巾町におけるフューチャー・デザイン制度化の取り組み

西條委員より、岩手県矢巾町におけるFDの制度化・行政実務への定着に向けた最新のドキュメント「未来のまちづくり装置 矢巾フューチャー・デザイン活用指針」の内容と意義について報告がなされた。

#### 報告のメモ：

##### ・「活用指針」の策定に至る背景と組織的自立：

矢巾町（人口2万8,000人、盛岡市からJRで15分ほどの町）では2015年からFDを導入し深化させてきた。当初は「条例化」を構想していたが、県庁アドバイザー等の指摘もあり、また首長が変更された場合でも活動が破棄されないよう、役場職員が主体となって2年の歳月をかけ、町民にも開かれた「活用指針」として策定した。外部研究者が手取り足取り指導するのではなく、役場自身がインディペンデント（自立的）に仕組みを構築している点が画期的である。

##### ・理念（未来からの逆算とウェルビーイング）：

「未来からの逆算（バックキャスティング）」を掲げる。さらに、個人単体の満足を追求する「私の幸せ」に、関係性や世代間を繋ぐ時間軸・利他性を意味する「人べん」を付加した倅「ウェルビーイング（well-being）」を核とする。これを支える運営ルールとして、①将来世代に配慮した政策推進、②持続可能なまちづくりに向けた町民学習、③職員の資質向上、の3本柱を定義している。

##### ・具体的活用場面の定義：

①長期行政計画（総合計画や都市計画マスタープラン）の策定における「未来への思いやり」、②身の丈に合った適正規模（ジャストサイズ）の公共施設整備（負の遺産を将来に残さないためのスマート・シュリンク思考）、③町民および職員が対等な「フューチャー・デザイナー（伴走者）」として共創する学習・研修システム、などが制度的に規定されている。

##### ・行政組織体制の強化：

2018年に設置された「未来戦略室」から、2022年には全庁サポートを目的とした「未来戦略課」へ拡大。各部門が全庁的にFDを支え合うエコシステムを定着させている。

#### 質疑応答・意見交換：

**江守委員：** 矢巾町の資料において「バックキャスティング」という語が多用されているが、西條委員の理論枠組みでは、現在から将来を予測するバックキャスト（プレゼン・デザインの一

部)と、将来にトリップして歴史を回顧する「フューチャー・デザイン(フューチャーズ・ヒストリー)」は区別されている。この用語や解釈について、自治体側の実践と理論との整合性はどうか調整されているのか。

**西條委員：**学問的には明確な差異があるが、実務や行政、自治体現場では「バックキャストिंग」という言葉が浸透しており使い勝手が良いため、無理に用語統一を強要せず、柔軟に許容している。大枠でFD的な将来思考のマインドが共有され、逸脱した方向に行かない限り、そうした柔軟な運用の方が地方自治体においては円滑に進む。

**井伊委員：**矢巾町は岩手医科大学付属病院等を有し、恵まれた医療・介護インフラがあるメディカルシティである。しかし一方で、医療扶助費が2025年には総予算の25%に達すると試算され、医療・介護で予算の大部分が逼迫している「典型的なサステナブルでない地方財政」を抱えている。町長や役場がこれほど熱心にFD活用指針を作っているにもかかわらず、こうした地方都市の最も深刻かつ本質的な医療・介護財政のボトルネックにFDが踏み込めていないように見えるのが極めて残念である。客観的にメスを入れ深めるべきではないか。

**西條委員：**数年前に岩手医科大学が盛岡から移設された際の多額の誘致交渉等、歴史的な「痛い部分」が行政実務的に存在し、矢巾町単独では言及しづらい政治的複雑さも背景にある。財務省も地方の予算持続性や健全性(財政危機)の面から本問題に注目している。井伊委員のように専門的知見を持つ外部の者が提言・客観的分析を行うことで、行政側も「将来を見据えた見直し」へと動くきっかけになるため、そうした外部アドバイスの連携を模索していきたい。

#### 4. 意見交換・その他

教育現場におけるFDの急速な展開状況、海外での活用実績について報告され、その後、学術的アプローチや来期に向けた分科会の活動体制に関して自由な討議が行われた。

##### 報告の概要：

###### ・大学教育におけるFD導入(岡本先生・九州大学)：

九州大学では前年から新入生全員(約2,700名)を対象に、60名の教員を動員してFDの体験講義をスタートさせた。これまで通常の議論では自分の「損得(利己的)」ベースに終始していた学生たちが、2050~60年のAI社会を想定した将来世代へトリップ(主観移動)した途端、自国だけでなく「他国の歴史や文化こそが極めて大切になる」といった大局的・利他的な視点へと見事に変容した。記述資料は未刊行だが、極めて有望な教育実践事例である。

###### ・中等・高等教育でのFD実践(高橋先生ほか)：

門真中学校での「財政とFD」の実践が報告された。生徒たちが予算100兆円をレーダーチャートソフト等を用いて分配し、持続可能性やリスクをシミュレーションする授業(4~5回連続)を自立的に開発・実践している。さらに、大阪の三国丘高校、兵庫県の青雲高校(通信制)での導入、N高グループが財務省と連携したFD型財政教育、ネパールでの未来シミュレーションなど、教育現場における若年層のFD実践が急拡大している。文科省の指導要領への導入には長期スパン(4~8年)の準備が必要となる点も議論された。

・海外でのFD導入展開：

米国カリフォルニアにおける「Future Design Group」の活動、またオランダにおける軍事イノベーションや、政府調達（プロキアメント）プロセスにおける仕様策定段階でのFDの試験的導入など、海外での予期せぬ多様な広がり実践状況が西條委員から紹介された。

質疑応答・意見交換：

**澤田委員：**パスト・プレゼント・フューチャーの時空間アプローチは、実験経済学・行動経済学の蓄積（タイムドメインの割引率・選好測定、不確実性やリスクドメインのプロバビリティアセスメント等）を集約して活かせる余地が極めて大きく、親和性が高い。

**西條委員：**従来の経済学のように「測定された既定の選好」を最大化するアプローチとは根本的に異なり、FDは制度や仕組みを通じて「人間が本来持ちながら、これまでの数世紀で抑圧されてきた長期利他的な『別モジュール』」を引き出すことを狙っている。目先のおいしいケーキを食べてしまう利己性を脱し、脳の異なるモジュールを活性化させる社会デザインである。

**栗山委員：**世界自然遺産や農業遺産などの研究において、土地所有権等の現行の法的・政治的制約条件を一度無視し、将来世代の理想像からバックキャストするFD的思考は強力な突破口となる。以前、学会会議で共同執筆した「森林環境税」の報告書にFD視点を含められなかったことが悔やまれる。今後、林学や他分科会にも本分科会の成果を横展開し反映させたい。

**岩佐委員：**日本人は短期的で直接的な利益よりも、長期的・間接的な公共の利益を重視し頑張る特質（例：円安時の長期的メリットへの納得など）があるため、FDは親和性が高く受け入れられやすい。一方で、「間接的な幸せ、長期的な利益」といううまいストーリーを作って町民や他者をマニピュレートし、都合よく合意へ丸め込むような「悪用者」が出てくる懸念はあるか。これを防ぐ手段はあるのか。

**西條委員：**経済学のメカニズムデザインのようにマニピュレーションを完全にシャットアウトする完璧な仕組み（悪用防止策）は学術的にも未完。しかし、不審な行為に対しておかしいと周囲が指を差せる「透明な社会システム」と「空気・規範」を作ることこそが、現実的な最大の防衛策となる。

**大垣委員（来期活動への展望）：**日本学会会議の法律と制度が来期から変わるが、今期の連携会員と任期が今期までの会員は、希望すれば自動的に来期の新制度での連携会員となることと決まった。会員である私も来期限りで退任だが、連携会員として残るため、是非西條委員にも連携会員として籍を残し、リーダーシップを取り続けていただきたい。来期は、前期になかった「政治経済学的な観点（マニピュレーション問題、合意形成プロセス等）」や「自然資本との共生」などの新トピックを取り入れ、さらに学問領域を広げて柔軟にFDを展開・継続していただきたい。

以上